

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第137集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993『関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 神保富士塚遺跡』(財)
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第154集
- 笛沢浩 2012『長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡』『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター報告書100
- 田村良照 2020『環状柱穴列考—弥生時代の祭場か—』『考古論叢 神奈河』第28集 神奈川県考古学会
- 中野市教育委員会 2014『長野県中野市遺跡詳細分布図(改訂版)』
- 前橋市・前橋市教育委員会・高崎市・高崎市教育委員会 2014『東国千年の都 前橋・高崎の弥生時代—2000年前の開拓者たち—』
- 平成25年度前橋・高崎連携事業文化財展リーフレット
- 山本直人 2009『環状木柱列からみた縄文時代晩期の地域社会』『名古屋大学文学部研究論集 史学』第55巻

第3節 弥生時代の鉄器加工

4次調査では、弥生時代中期後半という全国的にも早い段階の、集落内における鉄器加工の可能性が指摘された¹⁰。それは報告書作成段階で出土遺構や遺物を分類検討していく過程で導き出されたものであったことから、今回の調査では関係する遺構や遺物の検出に最善を尽くした。そのため、竪穴建物跡の床面付近の土は全てふるいに掛け、強力な磁力を持つネオジム磁石による磁着確認作業を試みた結果、複数の建物跡から鉄製品や小鉄片が発見された。

鉄製品2点は小型刀子の未製品である可能性が高い。小鉄片は当時の鉄器加工で排出される残片と指摘される資料である。また加工工具の可能性がある石器やフイゴ関連と想定される焼成粘土塊も新たに出土し、本遺跡における鉄器加工を総合的に考察しうる資料が揃った。

ここでは、それらが出土した竪穴建物跡の特徴を整理し、その構造を考察したい。千曲川流域における中期後半期の一般的な竪穴建物跡の場合、大きさが4~6mで、外形が円形や楕円形、隅丸方形を呈し、主柱は4本~6本で、床面中央のやや奥壁寄りに浅い皿状の炉が1基ある。本遺跡でもSB19やSB20といった、典型的な竪穴建物跡も検出されている。

それらに対し、床面中央に炉ではなく、ピットを持つ竪穴建物跡が複数検出された。SB18、SB24、SB29は現場段階でそのピットを確認し、「中央ピット」と呼称した(第3章第4節)。中央ピットは建物跡床面の中央付近に1基あり、平面は概ね楕円形で、断面は擂鉢状あるいは有段状の場合が多い。大きさは長さ50~80cm、深さ20~30cm程度である。ピット周辺の床面は非常に硬く締まり、床面が直接被熱した部分が複数見つかる場合が多い¹¹。

特徴的なSB24を見てみたい。大きさは3.62×3.30m、4本主柱の小ぶりな隅丸方形の竪穴建物跡である。通常の炉ではなく、中央やや南よりに楕円形で断面が有段状の「中央ピット」を持つ。ピットの大きさは長さ77×幅62×深さ26cmで、底面が硬化し、埋土には炭化物を含む。中央ピットと主柱の間の床面は硬化し、部分的に赤色化している。赤色部分は科学分析(土壤薄片観察分析)によって、被熱による変色作用であることが確認されている(第4章第3節)。床面付近からは小鉄片や磨製石鎌未製品、石錐、楔形

10 4次調査では鍛冶遺構としているが、杉山氏の考察に従い、鉄器加工とした(杉山2019)。

11 被熱の状況は村上恭通氏の弥生時代の鍛冶炉分類Ⅲ類(ほとんど掘方をもたず、床面をそのまま炉として使用する状況に近い)に似る(村上1998)。

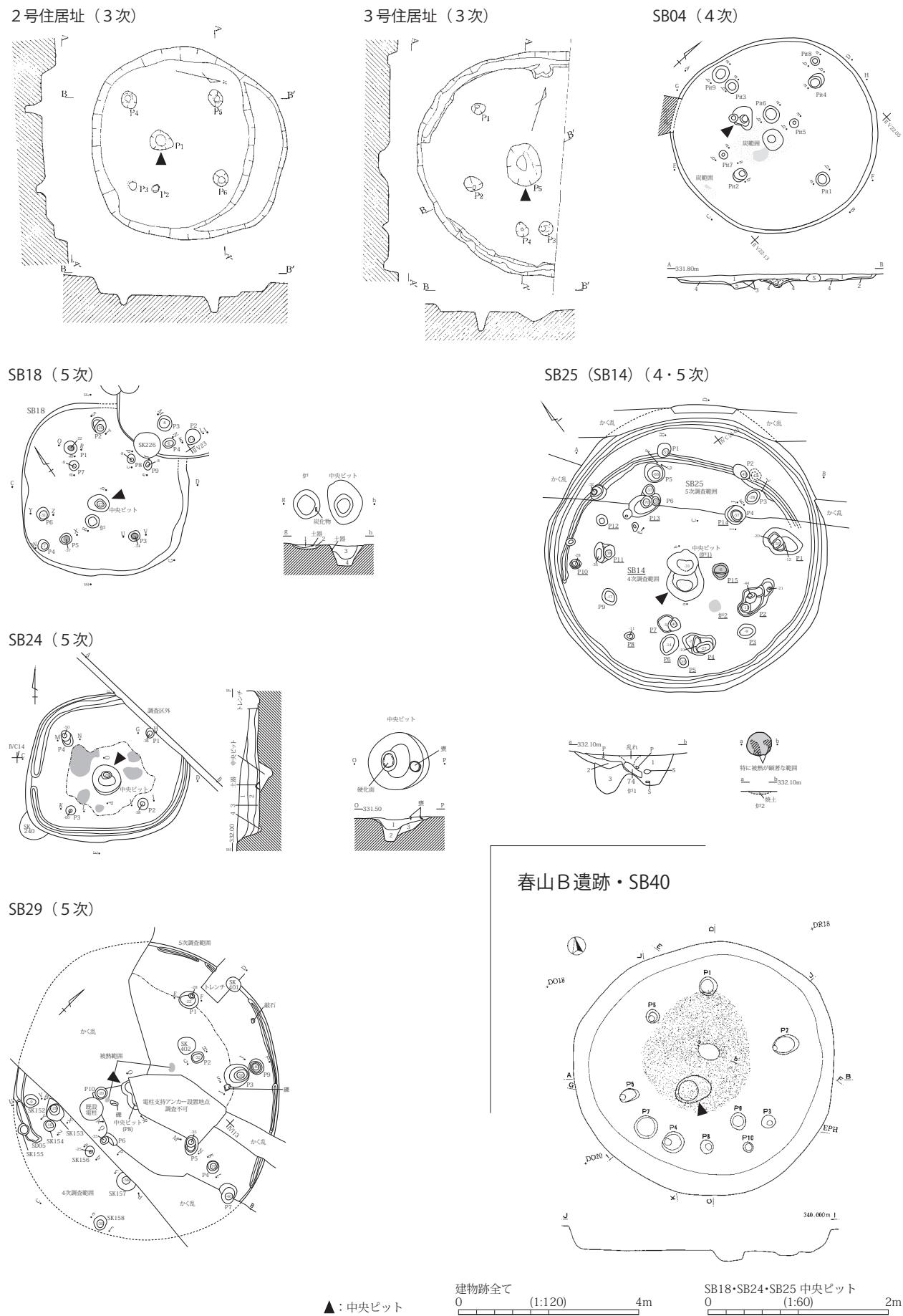
石器、刃器、敲石、砥石、台石の他に、太形蛤刃磨製石斧を転用した石槌が出土している（第3章第5節）。こうした状況から本跡は小規模な作業工房であったと推測する。例えば、小鉄板を加工する作業において、床面の熱源で予め鉄板を赤める過程等で、床面が被熱して赤化したのだろう。また台石上での切断や砥石による研磨を床面上で行う場合、中央ピットは工人が足を入れる等の目的で利用した、作業に必要なピットと考えた。

中央ピットを持つ堅穴建物跡は過去の調査事例も含めて、中期後半期で7軒確認された（第22表・第115図）。建物規模や形状から、隅丸方形で4.5m未満の小型タイプ（2号住居址、SB18、SB24）と、円形または楕円形で4.4～6mの中型タイプ（3号住居址、SB04、SB25（SB14）、SB29）に分けられそうである。中央ピットの埋土や建物床面から石器の剥片や碎片が比較的多く検出される遺構（3号住居址、SB04、SB25（SB14））もある。鉄製品や小鉄片の出土数は決して多くない点から、こうした工房内では鉄器加工に限定せず、石器製作や木器加工等の手工業生産的な複数の作業が行われていたと考えるべきかもしれない。

県内で初めて、弥生時代中期後半期の堅穴建物跡内から鉄製品（板状鉄斧）が発見された同じ長野盆地の長野市春山B遺跡¹²でも、中央ピットを持つ堅穴建物跡を1軒確認した（SB40）（長野県埋文1999）¹³。中

第22表 鉄器加工等工房の可能性がある堅穴建物跡（弥生時代中期後半期）

遺跡名	遺構名	形状・規模	床面・被熱部	中央ピット	主な遺物
南大原（3次）	2号住居址	隅丸方形 4.30×3.90 m 主柱：4 ベッド状	貼床 中央が堅緻	P 1 0.60×0.45 m 深さ不明 焼土なし	土器のみ、石器なし
〃	3号住居址	円形 4.90×(3.50) 主柱：2以上	中央貼床、堅緻 被熱：3か所 (小範囲)	P 5（擂鉢状） 0.90×0.75×0.25 焼土少量、石器の 剥片・碎片多量	土器、打製石鎌、磨製石鎌、 石錐、管玉、石器剥片・碎片
南大原（4次）	SB04	円形 4.40×4.30 m 主柱：4	中央に地床炉、炉 横の床面被熱	擂鉢状 0.6×0.5×0.2 m	土器、土製円板、台石、砥石、 敲石、楔形石器、石錐、剥片 (ヒスイ・チャート・頁岩)
南大原（5次）	SB18	隅丸方形 3.82×3.70 m 主柱：3以上	中央堅緻 中央北壁寄りに浅い地床炉	擂鉢状・底部平坦 0.48×0.24×0.24 m	小鉄片、土器、砥石、石器剥 片・碎片 (本跡が切るSB17出土の鉄製品 は本跡に帰属する可能性あり)
〃	SB24	隅丸方形 3.62×3.30 m 主柱：4	中央堅緻 被熱部複数あり	有段状・底部硬化 0.77×0.62×0.26 m	小鉄片、土器、台石、砥石、 敲石、石槌、刃器、石錐、楔 形石器、磨製石鎌未製品、石 器剥片・碎片
南大原（4・5次）	SB25 (SB14)	円形 6.14×6.28 m 主柱：新7、旧5 建替え・拡張1	中央南東の床面に 2基あり	擂鉢状 新： 0.70×0.60×0.35 m 旧： 0.80×0.70×0.42 m	鉄鎌、小鉄片、焼成粘土塊、 土器、土製円板、台石、敲石、 砥石、刃器、擦切具、楔形石 器、打製石鎌、磨製石鎌、磨 製石斧片、ヒスイ製品、石器 剥片
〃	SB29	楕円形 6.08×5.84 m 主柱：4以上	貼床、主柱内側が 堅緻、被熱2か所	不整形 0.65×(0.24)m 深さ不明	小鉄片、焼成粘土塊、土器、 凹石、刃器、石錐、楔形石器、 打製石鎌、石器剥片・碎片
春山B	SB40	円形 5.75×5.55 m 主柱：6	貼床、床面中央広 範囲に石器碎剥片 含む炭層分布	P11（楕円形） 0.70×0.55×0.20 m 炉と出入口の中間。 堆積する炭層に石 器碎剥片含む	土製円板66点、鹿角2、赤 色顔料、チャート剥片・碎片 2974 g、黒曜石剥片・碎片、 刃器、磨石、敲石、磨製石斧 未製品、磨製石斧



第115図 鉄器加工等作業場の可能性のある堅穴建物跡

中央ピット内や周囲の床面等からチャートの剥片や碎片が3kg近く発見されていて、石器製作跡と想定されている。この建物跡も中央ピット周辺の床面が硬化し、被熱した部分もあることから、熱源が必要な鉄器加工等も行われていた可能性が出てきた。

4次調査後に、本遺跡の詳細な分析を行った杉山和徳は、南大原遺跡で行われていた鉄器製作は、非常に簡素な形態を呈していた可能性があり、高温を用いる熱間鍛造とは異なり、裁断や研磨を中心とした鉄器加工に重きを置いていたと考察する。そして中期後半期のSB11・12 (SB30 (SB11・12) と同一)、SB14 (SB25 (SB14) と同一) を鉄器製作遺構と認定している(杉山2019)。SB30 (SB11・12) は確かに鉄鑿が出土し、床面が被熱していて、加工工具としての石器や、焼成粘土塊も確認されている。今回は中央ピットが明瞭ではなく、一覧から外したが鉄器加工が行われていたことを否定するものではない。

なお、今回の調査でSB30 (SB11・12) は建替え拡張が行われた10mを超す超大型竪穴建物跡であり、集落の中では抜きんでた規模を誇ることが明らかとなった。また祭祀空間と想定される環状土坑列が北に近在する等、有力者または集落共有の建物としての役割も想定しうる。先の春山B遺跡でも板状鉄斧は、床下ピットに使用痕跡の少ない完形の磨製石斧5点を一括埋納した特殊な竪穴建物跡 (SB01) から発見されていて、鉄製品の希少性を裏付ける事例ともいえる。本遺跡においても鉄鑿が発見されたSB30 (SB11・12) は、そうした特殊性を持つ建物であったのではなかろうか。

なお、後期前半期のSB13 (4次) やSB23も、鉄鎌や小型刀子未製品等の鉄製品や小鉄片、焼成粘土塊、台石や砥石等の各種石器が出土していて、鉄器加工等が行われていた可能性が高い。同じ時期のSB27は磨製石器の製作痕跡がある。中期から後期へ、集落や住居の形態や土器様相等が変容する画期にあって、こうした手工業生産がどのように継承されていくのか、今後検討すべき課題である。

引用・参考文献

- 臼居直之 1999「第5章まとめ」『春山遺跡・春山B遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 45
- 杉山和徳 2019「中野市南大原遺跡にみる弥生時代の鉄器製作遺構」『信濃』第71巻第9号
- 土屋積 2009『山を越え川に沿う—信州弥生文化の確立—』長野県立歴史館平成21年度秋季企画展図録
- 鶴田典昭 2016「第7章総括第1節南大原遺跡調査成果のまとめ」『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
- 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11—長野市内その9— 春山遺跡・春山B遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 45
- 櫛宜田佳男 2019「第1章石器からみた弥生社会と鉄器化の進展」『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社
- 櫛宜田佳男 2019「加賀及び能登地域への弥生文化の道」『北陸の弥生世界 わざとこころ』大阪府立弥生文化博物館令和元年度秋季特別展図録
- 櫛宜田佳男 2020「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—(最終報告書 論考編)』
- 櫛宜田佳男 2020「鉄器・青銅器からみた広域流通ネットワーク」『弥生時代の東西交流—広域的な連動性を考える』西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編
- 町田勝則 2020『稻作とクニの誕生—信州と北部九州—』長野県立歴史館令和2年度秋季企画展図録
- 村上恭通 1998「3 弥生人の鉄器生産」『シリーズ日本史のなかの考古学 倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村上恭通編 2017『モノと技術の古代史 金属編』吉川弘文館

12 長野盆地の北東に位置し、千曲川右岸の自然堤防上に弥生時代中期から後期の集落跡が形成される。中期後半期の竪穴建物跡は12基確認され、古段階の竪穴建物跡から鉄石英製の管玉製作、磨製石斧製作、有孔土製円板の加工を示す遺構遺物が出土。特定住居に限らず、すべての住居で複数の生業の痕跡をとどめる集落である。新段階の焼失家屋SB01では多数の磨製石斧とともに鉄斧が出土した(臼居1999)。

13 報告書では「作業用ピット」と呼称されている。